産経書房

〝生きづらい変人〟の変貌

オーラの発表会

綿矢りさ著（集英社・1540円）

周囲が気になって引きこもる女子高校生を描いて鮮烈なデビューを飾った綿矢りさが、20年を経て、一切周りを気にせずわが道を行く女子大生という全く逆のタイプを主人公に据えた。

「気にせず」というよりは「気になりたい」というべきかもしれない。人を好きになる気持ちの分からない主人公の海松子は、他者の気持ちを推し量ったり裏を読んだりすることなく、言葉をたて額面通りにやりとりする。

なんらかの診断名が付けられそうなレベルだが、本人は別段それを障害と感じてはいない。なにしろ、自分がクラスから孤立していて、軽いいじめまでもされていて、歴代の担任が思っていた」と両親から聞かされても全く心当たりがないのだ。はたから見れば生きづらい変人でも、主人公の内側から語られるこの物語はどこまでも和やかである。

外で交友関係を築けないのは家の居心地が良すぎるがゆえかと案じた両親は、たった駅4つ向こうの大学に通う娘を、半ば追い出すように一人暮らしさせる。主人公はそこには「抹の寂しさを感じる。用事を作っては実家に顔を出そうとする。

彼女は決してマザコンでもなければ、誰かと交際するのが楽しいと思う。他人を拒否する気は毛頭ない。ただ、飲み会などは極力避けている。

ただしこの主人公は極めて恵まれていた。向こうから距離を詰めようとする人物が次々と現れるのだ。それは容姿によるところが大きいらしく、その点ではこれは現代のシンデレラストーリーなのだが、しかし彼女は自ら一歩を踏み出しもする。それは、自らの「オーラ」を人前で晒すという不可思議なもので、それを機会にこれまでの自分から外に出ようと試みる。その後、いつまでもいつまでも幸せに一暮らせる保証はないが、とりあえずは彼女の変貌に、彼女の両親とともに胸をなで下ろした。

評・伊藤氏貴（文芸評論家）

千年前の海防 貴重な検証

刀伊の入寇

関幸彦著（中公新書・880円）

藤原道長が栄華の絶頂にあった1019年（「この世をば」を詠んだ翌年）、対馬・壱岐と北部九州沿岸が外敵「賊」襲われた。中国東北部の東女真族（刀伊）が海賊化し、朝鮮半島の高麗を経て日本に侵攻したのだ。かつて道長の政敵であった大宰権帥の藤原隆家は、大宰府から九州の武者を統率して、これを撃退した。

教科書では「刀伊の入寇」という名称が多く載っているこの事件は、日本史上初の大規模な海外勢力の侵攻であり、その後も元寇（モンゴル襲来）まで、大規模な侵攻は起こっていない（その点は先の大戦の空襲と艦砲射撃も）。また、死傷者も拉致被害者は数千人規模に上った。

本書は当時の軍制を踏まえ、平安時代最大の対外危機を検証し、武士台頭以前の戦闘の実態を明らかにしたものである。

著者はこれまで、最新の武士研究の一翼を担ってきたうえに、刀伊の入寇についても、その海防問題や当時の軍制について、2本の優れた論文を書いており、ぜひとも多くの方にこの本を読んでいただきたい。わが国における前近代の外交や戦争の歴史を学び、北東アジアにおいて日本の歩んできた道の、基本的で正確な知識を体得していただきたいのである。

評・倉本一宏（国際日本文化センター教授）

〝障害者は特別な人ではない〟

目の見えない白鳥さんとアートを見にいく

（集英社インターナショナル・2310円）

（集英社インターナショナル提供）

川内有緒さん

ノンフィクション作家の川内有緒さんは2年前、友人に誘われて、全盲の白鳥さんとアート鑑賞にでかけた。付き添ってくれる人々に作品を言葉で教えてもらって鑑賞する白鳥さんは、教科書のような解説ではなく、作品をめぐる即興の会話に興味をもっている。

川内さんは、白鳥さんに初めて同伴したときの体験を「衝撃だった」と振り返る。「言葉で伝えるため、1枚の絵を長いと30分かけてみますが、そうすると細部まで気がつくようになる。観察力が鍛えられるような面白さがありました」

だがそれは出発点で「気づきの一つでしかなかった」。友人らを交えて白鳥さんと鑑賞を重ねるうちに、障害や差別について思索は深まっていった。

大音量の心臓音に合わせて、電球の光が強弱を繰り返す現代アートを鑑賞したときのこと。視覚情報がない分、白鳥さんは聴覚などの感覚が鋭いのではないか、そんな川内さんの想像を白鳥さんはあっさり否定した。「盲人ないかなあ」と。

「上から下にさげすむことだけが偏見ではない。私もパラリンピックを見てすごいなあと思ってしまいましたが、その『すごい』の裏側に、偏見に近いものがあるかもしれないと、気づく必要はあると思う」

幼少時代「目が見えないんだから、ひとの何倍も努力しないといけない」と家族に言われた白鳥さんは、「目が見えるひとは努力しなくていいの？　そんなのずるい」と感じたという。

社会には金メダルを獲得する障害者がいる。そして、大勢の普通に暮らす障害者がいる。「パラリンピックを応援しただけで、障害者のことを知ったような気になっていないだろうか」と川内さんは問いかける。

「障害者を色眼鏡でみて、他の誰とも変わらない、特別な人たちではないということをときに忘れてしまうんですけど、自分なりの道をいく白鳥さんは、それを常に思い出させてくれる人です」

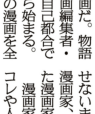
（篠原那美）

かわっち・ありお　昭和47年、東京都生まれ。著書に開高健ノンフィクション賞を受賞した『空をゆく巨人』（集英社）など。

聞きたい。

気になる！

コミック



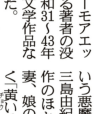
●東京ヒゴロ①（松本大洋著・小学館・1500円）

白い文鳥の表紙が目を引く、著者初の「漫画家」をテーマにした漫画だ。物語は50歳過ぎの漫画編集者・塩澤が出版社を自己都合で退職するところから始まる。

一度は手持ちの漫画を全て手放そうとした塩澤。葛藤の末、理想の漫画本を作ることを決意し、自分が信じる漫画家たちを訪ね歩き、かつての輝きを取り戻せないという悪魔の話を口にする。

コレと人情の機微を描くだから、面白くないはずがない。何気ない街の風景も実に美しい。手元に置き、折につけページをめくりたくなる一冊。

文庫



●静謐（せいひつ）（北杜夫著・中公文庫・990円）

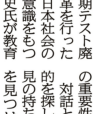
「どくとるマンボウ」シリーズなどのユーモアエッセーでも知られる著者の没後10年企画。昭和31～43年に発表された純文学作品など10編を収録した。

夫と死別し、子や孫らとの隔たって暮らす85歳のとよが、4歳の孫・千花の来訪を待ち受けるようになり、ある日、「何遍も見た」と、黄ばんだ船、台湾で珍種の蝶を追い求める採集人の物語「給間にて」など。

三島由紀夫が称賛した表題作のほか、失職した男と妻、娘の心温まる日々を描く。

著者のファンだった今野敏の巻末エッセー「ここから始まったも味わい深い。

新書



●学校ってなんだ！（工藤勇一・鴻上尚史著・講談社現代新書・990円）

東京都千代田区立麹町中学校長時代に定期テスト廃止などの学校改革を行った工藤勇一氏と、日本社会の同調圧力に問題意識をもつ演出家の鴻上尚史氏が教育現場の「息苦しさ」について語り合った対談集。

ブラック校則や不登校などを話題は多岐にわたるが、課題解決の糸口として対話せないまま今も描き続ける漫画家、何も描けなくなった漫画家…。

漫画家が漫画業界のアレコレや人情の機微を描く漫画家、何も描けなくなった漫画家…。

だから、面白くないはずがない。何気ない街の風景も実に美しい。手元に置き、折につけページをめくりたくなる一冊。

テーマにした漫画だ。物語は50歳過ぎの漫画編集者・塩澤が出版社を自己都合で退職するところから始まる。

一度は手持ちの漫画を全て手放そうとした塩澤。葛藤の末、理想の漫画本を作ることを決意し、自分が信じる漫画家たちを訪ね歩き、かつての輝きを取り戻せないという悪魔の話を口にする。

コレと人情の機微を描く漫画家、何も描けなくなった漫画家…。

だから、面白くないはずがない。何気ない街の風景も実に美しい。手元に置き、折につけページをめくりたくなる一冊。

更年期障害だと思ってたら重病だった話

村井理子著

翻訳家でエッセーストの著者は3年半前、突然の体調悪化に見舞われた。太ったり、疲れやすかったり、思い当たる前兆は更年期障害と片付けてきたが、まさかの緊急入院。重い心疾患が判明した。

数々の検査、病室の居心地、開胸手術―。闘病生活を詳述しながら、押し寄せる不安や葛藤を赤裸々につづった闘病記。女性総合誌のニュースサイトの人気連載に書き下ろしを加えて書籍化された。

著者は「もっともっと自分を大切にしていればよかった」「健康な生活は何より価値がある」と訴える。自分より家族を優先してがんばっている人に届けたい一冊。

（中央公論新社・1540円）

自閉症の画家が世界に羽ばたくまで

石村和徳・石村有希子著、石村嘉成絵

2歳で自閉症と診断された愛媛県在住の画家、石村嘉成さんと両親の物語。暴れ、泣きわめく嘉成さんに対し、両親は「わが子を暴君にしない」と突き放す療育を続けた。しかし、母の有希子さんは、嘉成さんが11歳のときにがんで他界。父の和徳さんが遺志を引き継ぐ。嘉成さんは高校3年で絵を描きはじめ、卒業後にフランスの美術展で優秀賞に輝き、アートでの経済的自立を目指す。

両親の共著となっている本書は、有希子さんの日記や嘉成さんの絵も収録。子供が自閉症児でなくても子育ての悩みを共有できる場面が少なくない。育児の参考に。

（扶桑社・1760円）

産経ネット碁会所

○始めよう、自宅でネット対局!!

●世界中の会員と24時間対局OK

会員募集

月額2,200円(税込)他

電話でのお問合せはパンダネット

0120-17-1536

通話料無料　イーナ　イゴウロク

＜受付時間＞

平日 10:00～12:30　13:30～16:00

第92期 ヒューリック杯 棋聖戦

五番勝負

第3局　第4局

先 ▲三冠（棋聖）藤井 聡太（2勝0敗）　▽渡辺 明（0勝2敗）

（前譜 ▲2四同角まで）

▲同角成89 ▽同 玉9 ▲2三歩3 ▽3一角 ▲5七銀 ▽5三歩20 ▲4二金右6 ▽同 玉6 ▲2二歩3 ▽3一角 ▲5七銀 ▽5三歩20 ▲4二金右6 ▽同 玉6 ▲2二歩3 ▽3一角 ▲5七銀 ▽5三歩20